

動物を訳す、文化を書く

ベネディクトにおける隠喩と引用の関係について

ロビン・ヴァイヒャート

「未開人や黒人や日本人はけだものじみている、猿そっくりだ、などというのはしょっちゅう耳にする言い草だ^①」とカリフォルニアで惨禍を忍んだテオドル・W・アドルノは記している。一九四五年に書かれたユダヤ人虐殺に関する文章にみられる一文だが、ここでの「未開人や黒人や日本人」という羅列は、ただ思いついただけのものではないだろう。「未開人」は文明の差異、「黒人」は人種の差異を示唆するのであれば、最後の「日本人」は文明や人種の差異を含みながら、おそらく敵味方という差異も内包しているだろう。太平洋戦争中のアメリカの戦争プロパガンダでは日本人は様々な動物、つまり、猿だけで

なく、蜂、蟻、虱、蛇、蝮、羊、牛、犬、鼠——西海岸では、窓に「当店ではネズミとジャップの両方を毒殺します」という広告を出す店があった——に例えられていた^②。

戦争情報局（OWI）がルース・ベネディクトに日本研究を委嘱したのは終戦の一年前である。その二年後の一九四六年にベネディクトは『菊と刀』を上梓する。戦前「未開社会」についての比較研究^③で大きな反響を呼び、世界大戦中に人種主義を批判する本^④やパンフレットを著したベネディクトだが、この本の中では「最も異質な敵」^⑤であった日本人の「文化」を描いている。出版以来様々な反論を呼んできたが^⑥、「余りに

も上手く書きすぎた」といわれるほど、その文体は一貫して高い評価を得ている⁽⁸⁾。

ここでは『菊と刀』における一つの支配的な比喩を検討していく。ベネディクトの修辭的な戦略を剔出する目的は、ベネディクトという「作家」の技法のみに問題を收斂させることにあるのではない。むしろ、文化の解釈がその「材料」となる言葉の翻訳に支えられているという事実が、民族誌の手法や人類学の理論と実践自体に内在させてしまう問題を明るみに出すことにある。そのために、引用としてベネディクトの「日本文化の型」に精巧に編み込まれていながらもはみ出してしまっているイメージ、一匹の犬、に焦点をあて、「文化」を説くこの文章が指し示す意味の剰余を抉り出す。

一

『菊と刀』は、歴史書の要約と、中心的に扱われる恩、義理、人情、忠などの日本人特有と言われる文化の「パターン」についての解釈が展開される章からなるが、その第一章では、戦争という時代背景の中で、研究がどのような条件と方法で遂行されたかが述べられる。

My assignment was difficult. America and Japan were at war and it is easy in wartime to condemn wholesale, but far harder to try to see how your enemy looks at life through his own eyes. Yet it had to be done. The question was how the Japanese would behave, not how we would behave if we were in their place.[...] I had to look at the way they conducted the war itself and see it not for the moment as a military problem but as a cultural problem.⁽⁹⁾

私に与えられた課題は困難であった。アメリカと日本は交戦中であつた。戦争中は徹頭徹尾こきおろすことはたやすいが、敵が人生を自身の眼を通してどんなふうに見ているのかということを見ることは、はるかにむずかしい仕事である。しかしそうしなければならなかつたのである。問題は日本人がどんな行動をするかであつて、もし彼らと同じ立場に置かれたならばわれわれはどんな行動をするか、ということではなかつた。(……)私は彼らが戦争そのものを遂行するやり方を眺め、それをしばらくの間、軍事的問題としてではなく、文化問題として見なければならなかつた。

第一章の冒頭にあるこの箇所では、lookとseeという言葉

が繰り返される。両方とも「見る」と翻訳されるが、英語の語法と意味内容上では明確な相違が存在する。lookは動作主格で、描写される動作の主体がその行為を意図的に遂行する、生命のあるものだと想定される。seeは状態動詞で、普通は進行形にすることができない。lookはかならず toward, for, at という動きの方向を表す前置詞をとまなうが、seeにはそれらの前置詞が付くことはなく、逆に into, onto, through, over, behind という動きの終着点・到着点を表す前置詞が付くことがある。

要するに、lookは、あるものを見ようとして見るということであり、特に視線を向けるという意味がある。一方、seeはあつものが自然に目に入ることであり、「見える」という意味を持つ。何かを眺めながら (look) 何かが見えなく (not see) ということは可能である⁽²¹⁾。

前記の箇所では、「私」も「敵」も lookの主語になっているが、seeの主語は「私」だけである。研究対象である人々が人生をどのように見ている (look at) かということを見る (see) こと、また、その研究対象の「流儀」を見て (look) それを文化的問題「として」見る (see) ことこそが、研究者の研究課題であるという。ここでは、lookを「注意を払う」、「関心を向ける」、「検討する」などの言葉で、seeを「理解」「認識」「察知」という言葉で置き換えてもいいだらう。視覚の機能を

指す言葉が思考・意識内容一般の転義として用いられることは特に英語に限ったものではない。しかし『菊と刀』の第一章のテキストで反復される視覚を指す動詞は単に「思考」や「研究」などといった一般的な意味で使われるだけでなく、文化人類学という学問の方法論そのものに関わるものでもある。

I had to forego the most important technique of the cultural anthropologist: a field trip. I could not go to Japan and live in their homes and watch the strains and stresses of daily life, see with my own eyes which were crucial and which were not. I could not watch them in the complicated businness of arriving at a decision. I could not see their children being brought up.⁽²²⁾

私は文化人類学者にとってもっとも重要な手法であるフィールドワークを諦めるしかなかった。日本に行って日本人の家庭で暮らし、日常生活におけるもろもろの負担を観察し、何が肝心で何が肝心でないかを自分の目で見て取ることもできなかった。日本人が一つの決断にいたる込み入った過程を観察することもできなかった。彼らの子供たちが育てられる様子を見届けることもできなかった。

この文では、watch と see という二つの動詞が繰り返し使われている。watch は look と同様に意思を持って見る、特に注意して見るという意味を持ち、動いているもの、時間と共に繰り広げられる事柄を見るという意味も持っている。この語彙でベネディクトは、研究対象となる社会に長期にわたって滞在し、生活をともにしながら対象社会を直接観察し記述するという、マリノフスキーが最初に提唱した参与観察という方法を描写している。日本と米国が交戦中であったために、ベネディクトは自身がここで文化人類学の基盤となる「技法」として認めているその方法を断念せざるをえなかったが、「一人の文化人類学者として、私は自分が用いることのできる研究技術と原則に自信を持っていた」¹²と述べ、人類学的研究そのものを諦める必要はないと説いている。参与観察の欠落を補う研究技術として、インタビュー、映画鑑賞、文献の解読の三つを挙げている。その際、映画を「日本ですでにその映画を見ていた日本人たちと共に、私の見方ではなく、彼らの見方で」¹³検討したという。一方文献を読むときには、「この絵の間違い」はどこにあるのか¹⁴と自問したというように、その解読法を新聞の「間違い探し絵」を見ることに例えている。もちろん参与観察の文脈で「見る」行為を指す言葉が頻出することは不可避に近く、映画

は主に視覚に基づくメディアであり、文献の解読を絵の鑑賞と比較することも慣用の隠喩の域を出ないかもしれない。だが、この第一章の最後、『菊と刀』という著作が開拓しようとする新しい研究領域が述べられる時に、それは視覚に関わる一層複雑な隠喩によって表現されていくこととなる。

Writers in every nation have tried to give an account of themselves. But it is not easy. The lenses through which any nation looks at life are not the ones another nation uses. It is hard to be conscious of the eyes through which one looks. Any country takes them for granted, and the tricks of focusing and of perspective which give to any people its national view of life seem to that people the god-given arrangement of the landscape. In any matter of spectacles, we do not expect the man who wears them to know the formula for the lenses, and neither can we expect nations to analyze their own outlook upon the world. When we want to know about spectacles, we train an oculist and expect him to be able to write out the formula for any lenses we bring him. Some day no doubt we shall recognize that it is the job of the social scientist to do this for the nations of

どの国の文筆家も、彼ら自身のことを説明しようと努めてきた。しかしそれは容易なことではない。ある国民が生活を眺めるレンズは、他の国民が用いるレンズとは異なっている。われわれがものを見る時に必ず經由せざるをえないこの目というものを意識することは困難なのである。どの国もそれを所与のものとしているのだ。そしてある国民に共通の人生観に与える焦点の合わせ方、遠近の取り方の癖は、国民達には神から与えられたままの風景の配置と見なされる。どのような眼鏡の場合も、眼鏡をかけている本人がレンズの処方を知っているなどということは最初からだれも期待しないし、国民が自らの眺望を分析することに期待することもない。もし眼鏡のことについて知りたければ、われわれは眼科の検査技師を養成し、検査技師の所へ持っていきさえすればどんなレンズの処方もちゃんと書いてくれるようになることを期待する。きっとそのうちにわれわれは、社会科学者こそ、現代世界の諸国民について、この検査技師と同じ仕事を行うものである、ということを確認できるようになるであろう。

こゝでは、目 (eye) 、レンズ (lens) 、メガネ (spectacles) 、

焦点 (focus) 、遠近法 (perspective) 、視野 (view) 、見通し (outlook) という、光学ないし視覚に関わる言葉によって人類学者の担うべき仕事が説明されている。この段落で喚起される視覚に関するイメージの全体からは、ベネディクトの基本的なスタンスとメッセージが浮かび上がってくる。眼鏡のメタファーは、様々な文化の間に本質的な優劣があるわけではないという、ベネディクトが『文化の型』でも説いている「文化の相対性の認識」を示している。意思を持って何かを見る時には見る器官そのもの意識されないという点も、それぞれの異なる文化がそれぞれに内在させている自文化中心主義の傾向を示唆していると言えるだろう。しかし、この箇所での視覚の隠喩がより一層重要な意味を帯びるのは、人類学の方法そのものと関連する時である。「検査技師」と「レンズの処方」という比喩で、ベネディクトは人類学者にある特権的な地位を与えている。それぞれの国民やその国の文筆家が自分について叙述していることの中には、ある歪みが含まれている。世界や自分を「レンズ」を通して見るので、そこに映る像はレンズによって決定される。さらに、人類学者も「眼鏡」をかけているのであれば、異国民のレンズの処方箋を書く時に、人類学者は自らのレンズから生じうる「処方」の歪みをどのように回避するのかという疑問が生じる。この隠喩からはその答えは読み取れない。ただ

し、「レンズ」そのものを問題にし、異国の人々のレンズを検査し、そしてまた、訓練を受けている専門家であるという点で、人類学者は自分自身を説明する文筆家たちと異なり、文化を「相対的に」見る能力を具えているということは示されている。lookとseeという語彙と同じように、レンズと眼科の検査技師という喩えにも、視覚の分断とその不平等な分配が含意されている。軍事的な問題を文化的な問題「として」見ると、ハネディクトは、敵と友の間の文化的な差異を認識するという『菊と刀』の問題設定、その具体的な研究手法と手順、そして「人類学」という学問の方法そのものも、ある二重の視覚の喩によって表現している。この視覚の喩を表す言葉は、「日本文化」に関する具体的な記述の中にも再び浮上することになる。

二

伝説、映画、捕虜とのインタビュー、新聞記事、ラジオ放送、議会演説、小説など、種々の材料を基にしながら、『菊と刀』はそこから引き抜いた実例の列挙によって形成されている。例えば、日本文化の「パターン」に関する議論が最初に繰り広げられている第五章では、兵士へのタバコの配給、群集の交通事

故に対する反応、「ありがとう」という言葉の字義的な含意、夏目漱石の『坊ちゃん』の場面、精神分析雑誌からとった失恋相談などの事例が次々と引き合いに出され、「恩」という「文化の型」が説明される。これらの事例の中で、第五章の冒頭に挙げられるその最初の事例は、日本の教科書から引用された「ハチ」という犬の話である。

Hachi is a cute dog. As soon as he was born he was taken away by a stranger and was loved like a child of the house. For that reason, even his weak body became healthy and when his master went to his work every morning, he would accompany him (master) to the street car station and in the evening around the time when he (master) came home, he went again up to the station to meet him.

In due time, the master passed away. Hachi, whether he knew of this or not, kept looking for his master every day. Going to the usual station he would look to see if his master was in the crowd of people who came out whenever the street car arrived.

In this way days and months passed by. One year passed, two years passed, three years passed, even when ten years

had passed the aged Hachi's figure can be seen every day in front of the station still looking for his master.⁽³⁹⁾

引用文中には「恩」という言葉はないが、引用に先行する部分でこれが「恩を忘れるな」というタイトルの物語であり、「恩」という概念が英語に翻訳できないものであり、無理に翻訳すると原語からずれ、意味が歪められてしまうということが強調されている。引用の後に続く文章では、「恩」が献身(devotion)を意味し、この話の教訓が忠誠心、「別のいいかただと愛(love)」⁽⁴⁰⁾であることが述べられている。ベネディクトによると、ハチとその主人の関係は、息子と母親の関係にも、臣民と天皇との関係にも対応し、それらの二つを繋ぐ関係が「恩」によって決定されるといふ。次の段落の解説では、分配された一本の煙草、ひとすりの酒が兵士の負っている「恩」を増やしていたということ、「カミカゼ自殺機搭乗員」がいずれも天皇に対する恩に報いようとしていたということが綴られていく。この議論では、子供を育てる家族、ハチの物語が読まれる学校、天皇を大元帥とする軍隊というそれぞれ独自の構造を持つ諸制度がどのように関係しあっているのか、また、犬の登場する物語のどこに「恩」があるのかは、説明されない。それにもかかわらず、ベネディクトの論述は明確で、それなりの

妥当性を持つという印象を与えるのである。

「恩を忘れるな」という短い物語は「ハチ」という犬のイメージを喚起する。物語の内容は、犬が、付き従ってきた主人が他界した後も主人の帰りを待ち続けるという一文で要約できるようなものだが、「待つ」という言葉は本文にはどこにもない。引用文では、「ハチは「見つけよう」とし続けていた」(kept looking for)、「見かけることを目指す」(look to see)という、本来視覚の機能を指す言葉で表現されている。ハチは路面電車から降りてくる乗客の人ごみに注意を向け、その中から主人の姿を見分けようとするが、主人を見かける(see)ことはない。十年が経っても主人の姿は現れないが、「見つけよう」とし続けている」(still looking) 犬の姿は駅前で「見ることができる」(can be seen)。⁽⁴¹⁾このlook/seeという言葉は、ベネディクトが「研究課題」を説明するときにも使用した言葉である。しかしここでこのlook/seeはベネディクトの「研究課題」に関わるだけではなく、これらの言葉が内包している序列や、その序列に定められている関係自体を反復するものでもある。第一章では人類学者の仕事の内容は「敵が」どのように見ている(look)か、を見る(see)という風に描写され、それは検眼士とレンズの隠喩にも表れていたが、この序列関係は「敵」の資料として提示されている文章自体にももう一度現れる。そこには「見

る」(look) 者が登場し、しかもその見る者は「見られる」(see) のである。ベネディクトの冒頭部のテキストとの言葉のレベルでの対応によって、ハチの物語はある種の「透明さ」を獲得している。ベネディクトの隠喩を借りて言うならば、この引用を読む読者は「敵の眼を通して見る」時に介在する、見るための「レンズ」を確認することができるのである。そして「敵」の資料であるハチの物語の中では、ハチという犬の行動は意思を持って何かを見ようと対象に「視線を向ける (look)」という言葉によって確かめられ、その「行動」は人々の目に「見える (see)」事柄として描かれる。見る者の見方を見ると、この構造を持つ人類学者の方法は、この「恩を忘れるな」と題される物語によって反復されるのである。

主人とハチの関係は、親と子、天皇と臣民の関係と類似しているためにベネディクトの議論の裏づけになる、というだけではなく、彼女が最初に提示した研究の手法が一貫していることの証明にもなる。だが、ハチの物語は物理的証拠ではない。この引用文は、一度、何者かによって¹⁸⁾ 日本語から英語に翻訳された言葉なのである。出典は、一九三四年に発行された尋常小学校の修身書である。テキストは少ない漢字と、旧仮名遣いで表記されている。

ハチ ハ、カハイ、犬デス。生マレテ 間モナク ヨソノ人ニ ヒキ取ラレ、ソノ家ノ 子ノ ヤウ ニシテ カハイガラレマシタ。ソノ タメ ニ、ヨワカッタ カラダモ、大ソウヂャウブ ニ ナリマシタ。サウシテ、カヒヌシガ 毎朝 ツトメ ニ出ル時 ハ、デンシヤノ エキマデ オクツテ 行キ、タカタ カヘル コロ ニハ、マタエキ マデ ムカヘ ニ 出マシタ。

ヤガテ、カヒヌシガ ナクナリマシタ。

ハチ ハ、ソレヲ 知ラナイ ノ カ、毎日 カヒヌシヲ サガシマシタ。イツモ ノ エキニ 行ツテ ハ、デンシヤノ ツク タビ ニ、出テ 来ル 大ゼイノ人ノ 中 ニ、カヒヌシ ハ キナイ カト サガシマシタ。カウシテ、月日 ガ タチマシタ。

一年 タチ、二年 タチ、三年 タチ、十年 モ タツテモ、シカシ、マダ カヒヌシヲ サガシテ キル 年 ヲトッタ ハチノ スガタ ガ、毎日、ソノ エキノ前ニ見ラレマシタ。¹⁹⁾

この原文をベネディクトが引用している英文と比較すると、僅かだが、確かなあるズレを察知できる。まず、原文の「カヒヌシ」は英語では master と、master あるいは主人は、指

揮権または支配権を持つ主体を指し、不平等な力関係、従属関係を含意するが、同時に相互的な社会関係として下位のものに対する責任、世話という含みも持つ。臣民、家来など下位の者 (subject) は、主人 (master) の支配下において彼に服従しているのだが、それはある種の選択に基づいたものであることから下位の者もある程度の主体性を保持しているといえる。一方、

「カヒヌシ」のヌシは、主人の含意を持つと思えるが、master と異なって、「飼主」は家畜または愛玩動物を飼いでる人を指し、人間と動物の区分を内包し、必ずしも感情的な繋がりや社会的な関係が必要としないのである。屠殺の対象であり、肉として食べられる家畜も「飼う」と表現されるので、この言葉は、人間と動物の区別を示唆すると同時に、飼う対象が主体よりも客体の位置に置かれることを示唆する。この客体化は支配権というよりは、所有権に基づいたものだから、その単語の語義だけから考えれば、owner という言葉を当てるべきだろう。つまり、master という訳語の選択は、訳文のハチを、客体から主体、動物から人間の位置へと変位させることとなる。

さらに、「カヒヌシ」が亡くなったことに関しては、原文は「ハチ ハ、ソレ ヲ 知ラナイ ノ カ」と推測されるが、それは「毎日 カヒヌシ ヲ サガシマシタ」というハチの行動を前提にした上での憶測である。この文章は、ハチが知って

いるかどうか見分ける方途がないという意味とともに、知らないからこそ探しているのだろうという推測を表明しているように読める。「ソレ ヲ 知ラナイ ノ カ」と、現在形で述べられるので、それは言い伝えられたハチの行動についてはなく、現前しているハチの「目の前に現れ」ている行動に対する推測なので、探しているハチを実際に見てその推測を行っている者がいるということが含意されている。訳文の whether he knew of this or not という表現においては反対に、ハチの存知不存知が論外にされている。whether I do it or not という慣用文と同じように、「それを知っているか知らないか」という文は、後に続く事柄や出来事の前提にならないことを指すことで、逆にその事柄の必然性を表す。「いずれの場合でも」、「知っているか知らないかを問わず」、ハチはその行動をとるという意味になる。また、ここでは探しているハチを実際に見て推測する者の存在は前提されていない。

英文のハチが何を知っているにせよ、一意専心に主人を見つけようとする (look)。ところが、日本語では、ハチは飼主を「サガシマシタ」。「さがす」という語はもとから視覚に限定されず触覚の感覚も含んだものである。そこには人や物を見つけようとしてあちこち見回したり、手でかき回したり、動き回ったりするという、身体全体の動きを含む行為が意味されている。

つまり、「大ゼイノ人ノ中ニ、カヒヌシハキナイカトサガシマシタ」という文を読むと、馱の前に座り、人々を眺めている犬ではなく、人ごみの中に入り、足の間を巡りながら、匂いを嗅いでいる犬が想像されるかもしれない。それも原文における「ハチ」とは矛盾しないイメージであるように思える。

「ハチノスガタガ、毎日、ソノエキノ前ニ見ラレマシタ」というように原文は終わるが、その最後の「見ラレマシタ」は、訳文ではcan be seenという表現となっている。過去形の「見られました」も、もうすでに完了した状態を指すため、間接的であっても、そこにハチを見た者、その目撃者の存在を示唆している。ハチは「誰か」に見られたのである。一方、英語のcan be seenでは、「可視性」が強調され、見る主体が固定・指定されない。ハチの姿は今でも「見える」ものとして現在形に移され、読者にとっても「可視」なものとして位置づけられている。

このように、引用文のハチの話におけるlookとseeの言葉遣いとそれに表される序列的な関係は第一章において提示された研究課題と一致するのだが、しかし、それは翻訳によってである。探していたハチは見かけることを目指したハチになり、見られたハチは見ることで見られるハチになる。それと同時に、

「それを知らないのか」という憶測が訳文から消え、その憶測を発する者もその姿を消すのだ。ハチの行動の条件に関する推測を述べる者の存在、そして、馱の前にハチを見たと思われる者の存在はぼやかされる。それは、その者がハチをどのように見たかという問い、つまり、「日本人」がハチを「どのように見たか」という問いが排除されるということも意味する。逆に、「飼主」を「マスター・主人」に替えることによって、訳文のハチは人間的な要素を増す。それは、主人を「見かけることを目指す」姿を与えられ、条件を問わずに行動する人間の姿に近付いたハチを、日本人のアレゴリーとして読むことを容易にするだろう。つまり、主人を見つげようとするハチを、主人を見る日本人「として」見る(see)という解釈、ハチと主人の関係が、「日本人」と天皇の関係と重なるという解釈が、翻訳によって、言葉の中に、すでに準備されている。

三

英訳からその姿を消した、ハチを見た者は何を見たのか。それはひとまずごく普通の犬であろう。ハチの物語は、元々実話に基づいているのであり、それは動物が人間のように喋ったり振る舞ったりする動物寓話ではない。十年で「年ヲトッ

タ」というので、人間より寿命が遙かに短く、その点でも実際の犬と変わらない。原文では、このハチという「カハイ、犬」は人に引き取られる。引き取る人間は、外から来た「ヨソノ人」であり、ハチをその馴染みのない他所のところに連れて行くが、その「家ノ子ノヤウ」にする。これは、人間ではないが、まるで人間の子のように扱うという意味で、人間と動物という区別の認識を前提としながら、行為においてその区別を無化するということと同時に、「よその」扱いをしない限りにおいて、家のものと区別しないことだと言える。つまり、人間と犬は明瞭に区別されながらも、引き取るという行為に端を発し、生活の場を共にし、共生・共存することによって、「社会的な」関係を結ぶという意味がそこには含まれるだろう。

「生マレテ 間 モナク」は「ヨワカッタ カラダ」の子犬だが、この「カハイ、」犬は「カハイガラレマシタ」という。かわいいとは、小さくて、弱々しい点に好感を抱き、それを、不憫だと思いつつも美しいと感じることである。自分より弱い立場にある者に対して保護の手を伸ばし、望ましい状態に行き届いてやりたいと思うような愛情ないし同情を込めた感情を「かわいい」と言い表すのであれば、「かわいいがる」はその感情に従って、かわいい対象を大事に扱う行為を指すだろう。ハチ

はかわいいがられ、「ソノ タメ ニ」身体が「大ソウ ヲ ヲ ヲ」になるというので、これは純粹な情緒そのものというよりは、感情を込めた、あるいは主に感情に動機付けられた、十分に餌を与えてやるというような物的な世話を含む具体的な行為を意味していると思われる。餌を与えるという含意を持つ「カフ」と、従属関係を表す「ヌシ」という語によって構成される「飼主」は、この「かわいいがる」ことを経て、登場する。ハチは「カヒヌシ」を朝駅まで送り、その帰宅を予感し、夜また駅に向かう。ハチは命令されることもないまま、毎日自発的に駅に向かう。感情や物質的な要求の満足と、自由な行動を含むので、ハチが飼主と結ぶ関係は、相互的であるといえる。それは傍について行くというような、身体的な距離の近さ、親密さとして現れる。犬として飼われ、飼主の低位に置かれても、自由で自発的行動をとる限りにおいて、ハチは積極的に社会的な行為を行う。「飼う」という語が含意している、人間と動物の差異は保持されながらも、その差異が社会性への連続を妨げることはない²⁰⁾。

「ヤガテ」飼主は死んでしまうが、ハチの駅まで迎えに出る行動は、この死によって中断されることはない。ハチは、「ソレヲ 知ラナイ ノ カ」、相変わらず駅に行き、「カヒヌシヲ サガシマシタ。」「ソレ」というのは、飼主が「ナクナリマシ

「タ」という事実である。身体機能の停止であるならば、死は人間と身体を持つ他の動物とを区別しないが、「ナクナリマシタ」というのは、「亡くなる」対象である他者に対する敬意の念を含んだ言葉であり、人間が社会的な存在として、社会の一員として死ぬことであると言える。ハチは飼主の生体が活動を終える死という事実と、社会的存在の消滅としての死、のどちらかを知らない、あるいは両方を知らないかもしれない。英文においては、ハチは、何を知っているのかは別として、「見つけようとする」、そして、その見つけようとするハチが「見える」、つまりlookはseeに連結し、可視化されたハチの「見方」は観察の対象となる。一方、原文のハチは、探すのであって見るのではない。だが、飼主が「ナクナリマシタ」ということを知っている上でハチを見る者はいる。人間であろうその見る者は、ハチが何を知っている（見ている）のかが見えない、知らない（見えない）ゆえに推測するだけだが、物語の冒頭で、その推測と同じく現在形で述べられる「ハチ ハ、カハイ、カハイ、カハイ」にある「かわいい犬」を見ているようだ。日本人としてではなく、「カハイ、犬」を見る人はそのかわいさに好感を持ち、ハチに共感する。ここにおける視覚は、感性に閃き、

「暖かい視線」(look/feel)としての情緒を伴うものだろう。社会的「視野」を共有しないだけで、情緒の連続性が打ち切られ

ることはない。そして、「ソレ」を知っている人間と犬を分ける知は、社会実践の場を分割することもない。情緒の連続性の中で行われるから、ハチの行動も社会的な行為としての意味を持つことになる。飼主が「ナクナリマシタ」ということに閃いてハチの知る内容や程度が不確定であるのに対し、ハチが駅に行く時、飼主を「サガシ」ていたことは疑いがない。

欲しいものを、あるいは失くしてしまったものを「さがす」ことには、ただ何かの到来を待つのではなく、より積極的に探しているものの方へ進もうとする身体的な動きや、知覚の働きが包含されている。「いぬ」が探偵の代名詞とされるほど、探し物と特権的に関連付けられているのは、その優れた嗅覚ゆえである。何かの匂いを嗅ぐということは、その対象に近づいてゆき、その対象に鼻を近づけて短く立て続けに鼻から空気を吸い込むという行為であり、対象が身体的に近くにあり、そこから発せられる物質を自分の身体に取り込むことであるので、視覚や聴覚などより肉体的な感覚であると考えられる。「さがす」が英訳で置き換えられるlookとseeという言葉の指す視覚は、見る対象から距離を保つことを必要とするのであり、対象に近づこうとし、その物質を体内に吸収する嗅覚のような感覚よりも高次な精神的知覚と定義されることが多い。また、「かわいい」の訳であるloveも、深い情動を意味するが、不在して

いるものや、神のように物体のないものを対象とすることも可能で、本来特定の行動を表現せず、肉体的な意味合いが弱く、精神的な意味合いが強い。一方、原文の中の、主に嗅覚という感覚と関わる「さがす」というのも、保護や世話も含意する「かわいがる」というのも、ある実践と行動を指し示す。また、探す対象が現実存在することが想定されると同様に「かわいがる」というのも、現前する身体的な存在を前提としているので、その両方の行動の主体と対象は、ある連続した時間と空間を共有しているといえる。

「オン ヲ 忘スレルナ」というタイトルも、この「かわいがる」と「さがす」という実践との関連で読めるだろう。このタイトルの「忘スレルナ」は、何かを忘れたために失敗したという負の経験から学び取った教訓を表現するのではない。ハチは「忘れる」ことはないようだ。だが、それは彼の「知らない」を前提としている。飼主が亡くなったことを「知らない」と思われるハチにとって、その飼主は「他界」ではなく、ハチのいる世界と連続している世界、ハチと同じ地平にいる。死んだ飼主がハチの内面のどこかに忘れ去られずにいるのではなく、外の現実存在しているのである。ハチはただ、その場に欠かしているから、感知できないから、飼主を探しているのだ。つまり、ハチの「忘れない」というのは、内面的なことではなく、

身体化されたものであり、その「忘れない」ことは、探すという行為によって、毎日駅の前で、人々の前で現実の中で実践される。それに対して、「見る者」にとって「忘れない」というのは、見たものの像が記憶から消えないことだろう。見たものを「頭」あるいは「心」の中にとどめること、その記憶の中に保持し、時折そこから呼び起こすことである。主人を「見かけることを目指している」英文のハチもその飼主の顔ないし姿の像の覚えがあると思われる。日本語のハチの「忘れない」が物理的な現実において繰り広げられるとするならば、この英訳のハチの「忘れない」ことは内面的なものである。行為としての「忘れない」は時間と空間の中で展開され、像としての「忘れない」は時間と空間を静止・止揚する。一方は身体的な運動であれば、他方は精神的なものである。一方を行動と呼ぶならば、もう一方は観照と呼べる。

このように、字義に沿って、ベネディクトの引用文とその原文の間の差異を読み取ること、ベネディクトの「日本文化」の記述にも光を当てることとなる。「最も異質な敵」^②を研究対象と据えているベネディクトは、その研究の「課題」を敵が「どのように見ている (look) かを見る (see)」と表現する。

その視覚の機能を指す言葉は、敵の民族誌資料として「引用」されるハチの話にも反復される。その訳文において、本来「さ

がす」ハチという犬は、「見る」(look)者となり、人間に似せた存在になり、それと同時に、「見える」(see)者として可視化され、本来の観察対象である敵のアレゴリーとして読まれるようになる。一方、原文においてハチを見て推測を述べる者の存在は消えていく。ベネディクトが、「異質な敵」を見ようとすればするほど、犬を飼ってかわいがっている者、駅でハチを見てかわいいと感じる者は消え、「犬」だけを見ることとなる。そして、その犬は、引き取られかわいがられる動物としての犬ではなく、人間に似せた、隷従することを運命付けられている人間²²「犬」ではない。

原文と英訳の間の差異を読み解くことで、ベネディクトが、この引用において、ハチの話を「誤読」し、敵の「見方」を「見なかった」ことを指摘できるかもしれない。だが、日本語で書かれているという理由だけで、ハチの話を「日本人」が登場する「日本文化」の縮図的な「事例」として読む必然性は無い。原文を「日本文化」のアレゴリーとしてではなく、「実話」として読み、そこからある異なる社会性の原型を読み取ることには、「日本文化」あるいは「日本文化」における動物と人間の特有なあり方の解釈を提供することを必ずしも意味しないはずだ²³。日本語と英語の文章の差異において、ベネディクトの理想とする人類学者が説明するような日米の「文化的な差異」、

あるいはその差異に由来する誤解を指摘しなければならぬというわけでもない。むしろ、原文と訳文の差異において、ハチの物語からある「社会性」と「動物性」の関係を読み取ることによって、ベネディクトが視覚の隠喩を通して論じる「文化」の概念と人類学者の方法に内在する問題が浮き彫りになると思われる。

人類学者の実践を描いている際にも、ベネディクトは主に視覚に関わる言葉を用いている。フィールドワークの説明においても、彼女は子供の育て方を見、日常のもろもろの負担を観察するというのが、子供をかわいがり、日常生活を邪魔するとは言わない。だが、馴染みのないところに移住し、その場所の人々と一緒に、「彼らの家で」(in their homes)²⁴暮らす者は、その人々の好意や助けに依存し、彼らの行為や情緒に動かされ、自分で行動し、情動を受け取り、異質な匂いや理解できない言葉と出会うはずだろう。言い換えれば、「フィールド」にいる人類学者が置かれている状況は、引き取られたハチのそれによく類似している。原文のハチと同じように、「現地」にいる人類学者は行為や情緒の連続性の中にとらわれている。その「参与」せざるをえないフィールドワークは、しかし、一種の「通過儀礼」として時間的に限定されている。フィールドから戻った人類学者はその記録やノートや自分の記憶にある実際に「観

察」したものの「翻訳」によって民族誌を構成する。現地から離れ、その情動と行動と身体的な感覚の領域から空間的なし時間的に距離をとるからである⁽²⁴⁾。人類学者の学問的なテクストは、その直接の情動と行動の連続性からの断絶の上に成り立っている⁽²⁵⁾。

『菊と刀』では、その距離ないし断絶が前提とされている。

「敵」の「参与観察」はできない。『菊と刀』の外的条件である戦争という状況は、フィールドワークを不可能にするだけではなく、それはフィールドワークに存在するはずの行為と情緒の連続性としての「社会性」の破綻を意味するともいえる。敵を動物(野蠻、劣等人種)として描いた戦争プロパガンダは、撲滅の対象としての動物をその断絶の隠喩とした。それに対して、軍事的問題を「文化問題として」見るベネディクトは、ハチと

いう犬に、観察の対象である「見る者」としての敵を見出し、文化を持つ「人間」としての敵との社会的な連続性を回復させようとする⁽²⁶⁾。ベネディクトはそこで戦争プロパガンダによる敵のイメージを否定するのだとしても、しかし、ハチを「見る者」に加えることによって、犬に特有な知覚感覚の性質を捨象すること、その「動物性」を否定しているのである。一方、ハチの話から、「動物性」と矛盾しない、ある動物的な身体性に基づく、行動と情緒の連続性としての社会性を読み取ることにはできる。これは、英訳ではなく、原文で読むこと、あるいは、敵の資料ではなく、友の資料として読むことによるというよりも、隠喩「として」ではなく、実際の動物の話を読むことによるだろう。

註

- (1) Th・W・アドルノ『ミニマ・モラリア』三光長治訳、法政大学出版局、一九七九年、一五〇頁。
- (2) ジョン・W・ダワー『容赦なき戦争——太平洋戦争における人

- 種差別』猿谷要監修、斉藤元一訳、平凡社、二〇〇五年、一七三頁。
- (3) ルース・ベネディクト『文化の型』米山俊直訳、社会思想社、

一九七三年。

- (4) ルース・ベネディクト『人種主義：その批判的考察』筒井清忠・寺岡伸悟、筒井清輝訳、名古屋大学出版会、一九九七年。
- (5) Ruth Benedict, *Chrysanthemum and the Sword: Patterns of Japanese Culture* (Boston: Houghton Mifflin, 1946), 1.
- (6) 『菊と刀』は早稲田大学 柳田国男や和辻哲郎などの著名な学者ならし知識人によって取り上げられ、批判された。その批判を含めて、特に「恥の文化」の概念への反論についての犀利な考察は、鶴飼哲「ある情動の未来——〈恥〉の歴史性をめぐって」、『主権のかたがで』岩波、二〇〇八年、一九七—一頁載録にある。書かれた当時の人類学という学問の文脈と、合衆国での反応と批評を含めたベネディクトの著作の受容史を包括的に知るためには、ソニア・リヤンの論及 (Sonia Ryang, "Benedictian myth," in *Japan and National Anthropology: A critique* (New York: Routledge, 2004), 47-72) が参考になる。
- (7) Margaret Mead, "The Postwar Years: The Gathered Threads" in *An Anthropologist at Work: Writings of Ruth Benedict* (New York: Avon Books, 1966), 425.
- (8) 例えば、詩人としてのベネディクトの個人史を掘り下げ、『菊と刀』をベネディクトの詩やほかの著作と読み合わせながら分析し、ベネディクトに対して厳しい批判をおこなったことで、受容史の中でも重要視されているラミスは、「すばらしく簡潔で優雅な文体で書かれたこの本は、比類のないほど明解に系統だてられ、全編にわたる語り口とに語られた話と豊かなイメージが光彩を添えている。まさに傑作の名に恥じない作品だ」と評している。C・ダグラス・ラミス『内なる外国「菊と刀」再考』加地永都子訳、時事通信社、一九八一年、一六八頁。

- (9) Benedict, *op. cit.*, 5.
- (10) Jeffrey S. Gruber, "Look and See," *Language*, Vol. 43, No. 4 (1967), 937-947.
- (11) Benedict, *op. cit.*, 5-6.
- (12) *Ibid.*, 6.
- (13) *Ibid.*, 8.
- (14) *Ibid.*, 7.
- (15) *Ibid.*, 13-14.
- (16) *Ibid.*, 100.
- (17) *Ibid.*
- (18) ハチの話の典故、英文の訳者は『菊と刀』の中で明記されていないが、ベネディクトは日本語を学習したことはなく、その理解は限られていたと考えられるため、翻訳は彼女によるものではなごと思われる。
- (19) 『尋常小学修身書 児童用』巻二、文部省、一九三四年、七五—七七頁。
- (20) 「ハチ」という名前も、その社会性の連続性として解釈できる。固有名で呼ばれることは、社会の一員として認められることの前提と考えられる。クロード・レヴィ・ストロースによると、「われわれ（フランス人・ヨーロッパ人）はオーストラリアやアメリカ・インディアンのいくらかの部族がやっているように、犬に人間と同じような固有名や親族呼称をつけて呼んだりはない。われわれは逆に、犬専用の一連の名前をつけてやる」(『野生の思考』大橋保夫訳、みすず書房、一九七六年、二四六頁)。人間社会のメンバーと「家畜」として人間社会に加わっている犬の位置を、明確に区分けるその命名法と違って、日本語の「ハチ」というのは犬につく名称でありながら、落語など

によく出て来る男性の呼び名の一つでもある。「ハチ」は、英訳のテキストにおいては翻訳されていないが、英文の中ではその名称は「日本人」の名前の代名詞としての意味しか持たないだろう。つまり、ハチは、日本語においては犬と人間のどちらにも使える名前として区別されないが、英文において、日本語の名前としてしか区別されない。

(21) Benedict, *op. cit.*, 1.

(22) 言語と「文化」あるいは事例とその「文化」が一致する必要はないからでもあるが、ハチの話から時代を超える「日本文化」を読み取るよりは、例えば、電車という近代的な交通機関、「ツトメ」での賃金労働、駅という都市空間、「カヒヌシ」という無名な都市住民、「大ゼイノ人」(crowd of people)の都市群集、毎日「デンシヤノツクタビニ」の永遠の反復、というような近代的なモチーフを読み取ることもできる。

(23) Benedict, *op. cit.*, 6.

(24) Johannes Fabian, *Time and the Other: How Anthropology makes its object* (New York: Columbia University Press, 1983) 参照。

(25) 「参与観察」という方法論の起源となるマリノフスキーの著作

自体に、この分析が書き込まれているといえる。マリノフスキーは第一次世界大戦勃発後に敵国人としてオーストラリアから出国不可能になったためにトロブリランド諸島に赴いたのだが、この滞在中に書かれ、彼の死後に刊行された「厳密な意味での」日記に、彼は自身の「淫乱な妄想」や雰囲気・情調(ポーランド語の文章の中で頻繁に使われるドイツ語の「シュティムング」など、フィールドから離れ去った後にそこでの「観察」に基づいて著すこととなる民族誌のどこにも浮上しない感情や情緒を記録している。B・マリノフスキー『マリノフスキー日記』谷口佳子訳、平凡社、一九八七年参照。

(26) ベネディクトは『菊と刀』の中でカミカゼ特攻隊の士気に文化的な解釈を与えたが、合衆国の技術者は、特攻隊に対抗できる

技術として、電子の目を持ち、遠隔操縦できる無人戦闘機の開発を提案した。ベネディクトの方法論と同様に、その技術的な問題としての解決法も、空間的な距離と視覚、断絶と連続性の再構成に基づいて提示される。Gregoire Chamayou, *Théorie du drone* (Paris: La Fabrique éditions, 2013), 123-125. 参照。

(Robin Weichert / 博士後期課程)